

Title	ランバ語の記述的研究 ―テンズ・アスペクト体系と 叙述類型との関わりを中心に―
Author(s)	牧野, 友香
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76608
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (牧 野 友 香)	
論文題名	ランバ語の記述的研究 - テンス・アスペクト体系と叙述類型との関りを中心に -
論文内容の要旨	
<p>本論文では、第1章でランバ語の概要について述べたのち、現地調査で得たデータを用いて第2章から第6章においてランバ語の文法について全体的な記述を行い、第7章ではランバ語のテンス・アスペクト (以下TA) 体系についての再検討を行った。</p> <p>第1章では、ランバ語の先行研究や社会言語学的な背景について述べたのち、文法的な概略を述べた。ランバ語が話されている地域では、地域共通語としてベンバ語が話されており、このベンバ語は先行研究でも指摘されているとおりランバ語との類似性が高い。また、ランバ語は膠着性の高い言語であり、それぞれの語が文において果たしている機能は、その語の構成要素によって見極めることが可能である。</p> <p>第2章ではまず、ランバ語の音韻について述べた。ランバ語の母音は <i>i, e, a, o, u</i> の5母音体系で、それぞれに長母音が存在する。子音は <i>/p, t, k, g, β, f, s, l, m, n, w, j/</i> の12個である。音節の構造は (N)(C)(G)V である。子音あるいは母音が連続することによって起きる現象もこの章で述べた。</p> <p>第3章では、名詞、名詞修飾語について述べた。名詞や名詞類は、接頭辞と語幹からなる。ほかのバントゥ諸語と同じようにランバ語にも名詞クラスが存在し、その数は18である。名詞修飾語のとり方接頭辞も、被修飾名詞の属する名詞クラスに応じて形態が異なる。名詞修飾語の接頭辞のとり方には2パターンあり、形容詞とそれ以外の名詞修飾語とで異なっている。名詞、名詞修飾語は文修飾要素として機能することもあるため、文修飾要素についてもこの章で述べた。</p> <p>第4章では、動詞について述べた。動詞は、動詞語根に接頭辞と接尾辞が膠着して構成される。動詞の膠着性の高さは、名詞クラスと並んでバントゥ諸語の最大の特徴のうちのひとつである。動詞語根の前に入る要素は、順に前主語接辞、主語接辞、TA接辞、目的語接辞である。これらのうち主語接辞とTA接辞は直説法において必須要素である。動詞語根の後ろに入る要素は、順に派生接辞、語尾であり、派生接辞は任意である。主語接辞、目的語接辞について述べたのち、派生接辞、接語について述べた。TA接辞と語尾は活用に関わる要素であり、それぞれの組み合わせによって表されるTA形式についてもここで羅列した。また命令法や接続法など、そのほかの形式についてもここで述べた。</p> <p>第5章で扱ったのは、動詞を用いない文である。動詞を用いない場合、名詞あるいは名詞修飾語の語形変化か、あるいはコピュラ <i>ni</i> によって述部であることが表される。主語が人称である場合や、テンスが現在以外である場合はコピュラ動詞 <i>li</i> あるいは <i>βa</i> が用いられる。</p> <p>第6章では、語順と情報構造について述べた。基本的な語順は主語、動詞、目的語である。しかしながら焦点が当たる場合は異なる。目的語が焦点である場合は基本語順でも問題ないが、主語に焦点が当たる場合は基本語順でなく、分裂文を用いなければならない。これには、主語の持つ主題性の高さが関わっていると考えられる。</p> <p>第7章では、ランバ語のTAについて、Doke (1922, 1938) の問題点をあぶり出しながら再検討を行った。Doke (1938) は用語の使い方が独特で、TA体系の理解を妨ぎかねない状態だった。そこで本論文ではComrie (1977) やDahl (1985), Bybee et al. (1994), Nurse (2007, 2008) による定義にもとづきTA解釈の再検討を行った。また、すでに使われなくなった形式や、地域共通語であるベンバ語から借用したと思われる新たな形式が存在していることがわかり、これらの事実も反映させながらランバ語の新たなTA体系の提案を行った。</p> <p>ランバ語のテンスは、過去、現在、未来の3つであり、そのうち過去と未来は、それぞれ発話当日</p>	

と昨日以前，発話当日と翌日以降に時間区分が2分割される。アスペクトには，完結相 (Perfective)，非完結相 (Imperfective)，永続相 (Persistent)，完了相(Anterior) が見られる。筆者が新たに TA 体系に追加した σ -形式は，完了相の形式のひとつである形式⑩と機能が似ていることや，形式⑩と補完性があることから，便宜的に「完了相」と同じ扱いをした。しかしながら，すでに示しているように σ -形式は完了相の持つアスペクト情報を持つことはできない。むしろ， σ -形式は時間性から独立した出来事を表している。同じ用法は形式⑩にもある。そこで，ある出来事が特定の時空間でなければ成り立たないものなのか，あるいはその逆で時間の流れに左右されることなく成立するものなのかという叙述類型論 (cf. 益岡 (2008) など) の観点を導入して論を展開したが，今後さらなる議論が必要である。

本論文では TA を中心に Doke (1922, 1938) による問題点をあぶり出し，再解釈を行ったが，第2章から第6章までにおいても Doke (1922, 1938) において問題のある記述が見られることがわかった。今後は，ランバ語の文法全体について Doke (1922, 1938) を再解釈していく必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (牧野 友香)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 言語文化研究科・教授 米田 信子
	副 査 言語文化研究科・教授 小森 淳子
	副 査 言語文化研究科・教授 清水 政明
	副 査 言語文化研究科・准教授 原 真由子
	副 査 言語文化研究科・講師 大塚 行誠

論文審査の結果の要旨

本論文は、ニジェール・コンゴ語族に属する「バントゥ諸語」と呼ばれる語群のひとつであるランバ語の記述研究である。ランバ語は、ザンビア中部に位置するセントラル州とコッパーベルト州で話されている。約7ヶ月にわたる現地調査で収集したデータをもとに、ランバ語の文法を網羅的に記述した上で、テンス・アスペクトに焦点をあて、その体系を提示することを目的としている。

本論文の本論部分は、第1章から第5章のランバ語の文法記述、第6章のテンス・アスペクトの再検討、の2つに分けられる。

文法記述は、第1章の音韻で始まる。ここでは、音韻体系、音節構造、音韻規則を中心に説明している。第2章では、「名詞類」と区分される名詞と名詞修飾語の説明をしている。ランバ語には名詞クラスとそれを基盤とする文法呼応システムがある。これはバントゥ諸語の特徴のひとつでもある。名詞修飾語には主名詞が属するクラスに一致した接頭辞が付けられるが、形容詞とそれ以外の名詞修飾語とでは現れる接頭辞の形式が異なっていることが報告されている。第3章は動詞の章である。膠着性の高い動詞構造は名詞クラスと並んでバントゥ諸語の特徴のひとつであるが、ランバ語もこの特徴を持っている。動詞を構成する各要素、すなわち、前主語接辞、主語接辞、テンス・アスペクト接辞、目的語接辞、語根、派生接辞、語尾、についての説明、さらに、直説法、命令法、接続法の各活用形の形式と用法を説明している。ここで紹介されている直説法のテンス・アスペクトの各形式が、本論文の中心である第6章につながっている。第4章では、動詞文以外の文型を紹介し、それぞれの構造と活用を説明している。第5章は語順と情報構造の章で、ランバ語の語順に情報構造が関係していることが述べられている。ランバ語の基本語順はSVOであるが、主語に焦点がある場合には分裂文が用いられ、SVOの単文を用いることはできない。以上、第1章から第5章の文法記述では、音韻論から統語論や情報構造まで、ランバ語を網羅的に記述している。

第1章から第5章がランバ語全体を対象としているのに対し、第6章はランバ語のテンス・アスペクトに焦点を絞っている。「テンス・アスペクト体系と叙述類型との関わりを中心に」という副題がついていることからわかるように、この章は本論文の中心でもある。アフリカ言語学における記述研究の対象は、主に先行研究のない、いわゆる「未知の言語」であるが、牧野氏が対象としているランバ語は、宣教師Dokeが100年近く前に2冊の文法書を記している。第6章で牧野氏は、Doke (1922, 1938) のデータを自身のデータと比較しながら検証し、Doke (1922, 1938) に見られる問題点を指摘すると同時に、言語接触による言語変化を明らかにしている。

テンスについて、Doke (1922, 1938)はランバ語の過去時制には3つの区分があるとしている。これに対して牧野氏は、少なくとも現在のランバ語では発話当日と前日以前の2つの区分であると主張している。また、Doke (1922, 1938)では区分が明確に示されていなかった未来時制についても、発話当日

と翌日以降で区別されることを明らかにした。Doke (1922, 1938)の一番の問題点として牧野氏が指摘しているのがアスペクトの分析である。Doke の分析ではかなり複雑に見えたアスペクト体系だが、牧野氏はDokeが用いている用語の不統一を指摘し、その再検討とデータの検証を行い、結果的に、完結相(Perfective)、非完結相 (Imperfective)、持続相 (Persistive)、完了相(Anterior) の4つの区別にまとめ直した。またDoke (1922, 1938)で報告されている形式のなかにはすでに使われなくなっている形式があることや、地域共通語であるベンバ語から借用したと思われる新たな形式が存在していることを明らかにした。さらに牧野氏は、ランバ語には2種類の完了相の形式があり、それらの違いが事象叙述と属性叙述の違いであると説明している。これらのことを反映させ、ランバ語の新たなテンス・アスペクト体系を提案することで第6章を結んでいる。

現地調査でしっかりとデータを収集し、それをもとに緻密な記述がなされている点は高く評価できる。また、牧野氏は「未知の言語」ではなくすでに記述研究が存在する言語を対象として、先行研究が示すデータを入念に検証し、牧野氏本人のデータと比較検討することで、共時的な現象の記述に加えて、テンス・アスペクト体系に見られる通時的な変化を指摘した。これはバントゥ諸語の記述研究において新しいアプローチである。本論文が再検討の対象として扱ったのはテンス・アスペクト体系だけであるが、第1章から第5章の文法記述のなかでも、さまざまなレベルで通時的な変化の可能性が示されている。これは、古い文法書が存在するバントゥ諸語の新たな記述研究の必要性を示唆するものである。さらに、バントゥ諸語研究に叙述類型論の視点を取り入れたのは本論文が初めてのことであり、バントゥ諸語研究に対する貢献は大きい。

一方で、いくつかの問題点や課題も挙げられる。まず構成の不備である。収集したデータとその分析に大きな問題があるわけではないが、それらの提示の仕方については問題が散見された。例えば、「語」の捉え方などの説明がないまま接辞や接語といった用語がいきなり出てくる、基本語順についても、情報構造との関わりでしか説明されていない、句や節の構造が説明されていない、などが挙げられる。これらは、文法を理解するための基本情報であり、最初に説明されるべき事項である。これらの情報が「前提」として最初に示されていれば、ランバ語の全体像がイメージしやすかったように思われる。各章で扱われている項目についても同様である。前提となる情報や全体像が示されることなく、いきなり詳細についての説明が始まっていることは、論文をわかり辛くしてしまった。特に、本論文の中心であるランバ語のテンス・アスペクト体系について、その全体像が最初に示されていないことは残念である。これら前提となる情報の説明不足は、最終試験において最も指摘が多かった点である。

説明不足とは反対に、綿密に記述しようとするあまり説明が煩雑になり、かえって理解しづらくなっているところもある。論文の流れを妨げないためにも、それらを脚注や別の節で述べるといった工夫がほしかった。また、音声と音韻のレベルや音韻論と形態音韻論の区別が不明瞭になっているところも見られる。後者については膠着性の高いバントゥ諸語において音韻論と形態音韻論の区別が難しいのも事実であるが、少なくともそれに対する説明は必要であったと思われる。

さらに、第6章において、言語接触の結果だと思われる現象を報告してはいるものの、その根拠となる例が挙げられていないこと、また通時的な変化の過程を説明するには至っていないことも課題として残っている。

しかしながら、これらの問題点や課題を残しつつも、緻密で具体的なデータを提示しつつ主張に行きついた本論文は、バントゥ諸語研究に対する貢献はもちろんのこと、少数言語の記述研究に広く貢献するものであることは疑う余地がない。十分に博士論文に値するものであり、論文審査担当者全員一致で「合格」の結論に達した。